

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H05981

研究課題名（和文）明治期国語教科書と平仮名初習者の筆写資料とを連関させた平仮名字体史研究

研究課題名（英文）Historical research of hiragana grapheme with special attention to the relationship between Japanese language textbooks and beginners' handwriting in the Meiji period

研究代表者

岡田 一祐 (Okada, Kazuhiro)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・特任研究員

研究者番号：80761220

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：明治期の国定化以前（検定期）の国語読本の平仮名字体研究のために以下のことを行った。(1)国立教育政策研究所の江草由佳氏の協力を得て、明治期検定期初期の主要な国語読本をコーパス化するための翻字および文字画像の作成を行い、試行的な分析を行った。(2)江戸期の仮名字書である『和翰名苑』をもとに字体データベースを作成し、字体記述の参照先とすべく、システム開発を行い、試験公開を行った。

研究成果の概要（英文）：Aiming at investigation of the graphemic history of hiragana in the authorized Japanese textbooks in the Meiji period Japan, this project has worked on: 1) in collaboration with Dr. Egusa Yuka at the National Institute for Educational Policy Research, transcribing and cropping of major textbooks, in preparation for the grapheme corpus of authorized Japanese textbooks, and preliminary analyses, and, 2) constructing the Wakan Meien hiragana grapheme database in the hope of making it a reference in description of old hiragana graphemes, and conducting a public trial.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語学 文字史 国語教科書（読本） 平仮名字体 明治時代

1. 研究開始当初の背景

平仮名は、かつて、ひとつの音韻を表すのに複数の形をもってすることができたが、明治33年に整理され、現在のようにひとつの音韻とひとつのかたちが対応することとなった。それぞれの仮名のかたちを仮名字体と言い、整理されて使われなくなった仮名字体を総称して変体仮名という。この字体の整理について、従来、数ある仮名字体のなかから現代の平仮名以外が淘汰されていったものとの理解がなされていた。しかしながら、江戸時代においては歌手本の字形は一般的な字形とはかならずしも言えないという問題があったが、江戸時代と明治時代を結ぶ研究はほとんど為されてこなかったために、問題が顕在化してこなかった。

また、明治時代の研究は、おおく調査対象が活版印刷された本に偏る傾向があった。しかし、活版印刷においては、活字の準備量を抑えるために仮名字体の整理を好んで行う可能性もあり、明治時代の平仮名の歴史を考えるには、活字印刷ではない媒体との比較が必要である。

2. 研究の目的

研究代表者は、博士論文において、明治時代の国語教科書の分析を通じてこの問題に取り組み、いろは歌手本の仮名の標準（以下、いろは仮名と呼ぶ）に教科書が統一されるようになったのは明治時代中期からであることを示した。すなわち、仮名字体の整理は、淘汰のような自然現象ではなく、ある程度人為的に行われたということである。また、国語教科書の検定作業を検討するなかで、明治20年の教科書に実際に文部省が仮名字体の整理へと誘導した形跡を発見した。

そこで問題となるのは、このような字体整理がどのように広まっていったかである。この解決のためには、印刷された資料の検討では不十分で、初習者がどのように平仮名の字体を学習していったか明らかにすることは不可欠である。印刷された資料、とくに活字で印刷された資料には、字体を検討するうえで不都合な点が存する。まず、印刷には多くのひとが係わるという点である。活字印刷にせよ、木版印刷にせよ、原稿作成・印刷するための版面の作成などはすべて分業であって、相互に影響しあうものである。この影響関係を版面からのみ理解することは不可能に近く、曖昧な点が残ってしまう。つぎに、活字印刷では、ふるい活字を使い続けることがある点である。当時活字は高価なものであったため、摩耗しきるまで使われることはめずらしくなかった。また、活字の補充がどのように行われたかも不分明な点を残し、字体整理の波及との対応を探るのは困難である。この2点は、手書き資料にはない問題である。また、初学者は字体整理の影響をじかに被る

存在であり、その初学者に字体整理がどのように伝えられたかを理解できれば、字体整理の広まる過程の理解も大きく進むものと考えられる。

これまでの研究では、研究成果を要約して提示するという方法で進められてきたが、仮名字体のように見るものによって受け取り方が変わってくるものは、実例の蓄積に直接当たり得るようにすることが望ましい。本研究では、そのような実例の蓄積を字体コーパスのかたちで提示することで、波及の具体相を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

標記の研究にあたっては、①実例を積み重ねることと、また②実例を提示するうえで、実例の分析の指標になるものが必要である。そこで、本課題においては、両者の構築を行うこととした。

①実例を積み重ねるについては、まず、国語教科書の字体コーパスを作成することを試みた。使用する教科書としては、明治検定期の国語教科書のうち、文部省が作成し民間作成の教科書の範とさせようとした『読書入門』（1886年）・『尋常小学読本』（1887年）および大手教科書会社のひとつである学海指針社編の『帝国読本』（1893年）を選定した。国立教育政策研究所より、同所教育図書館所蔵の教科書を電子画像化したものの提供を受け、電子本文の作成、字体画像の切り出しを行うこととした。

このふたつの資料を対象としたのは、この時期が仮名字体統一への前段階としてくわしい実態を観察することが求められる時期のものだからである。研究代表者は、いろは仮名によって教科書の字体が統一されるようになったことをかつて示した（岡田一祐「明治検定期読本の平仮名字体」『日本語の研究』10(4), 2014）。『読書入門』および『尋常小学読本』は、まさにこの検定期の指導的教科書であり、独自色の多少はあったのにせよ、いずれの民間教科書も、なんらかのかたちでこれらの教科書に倣うところがあったものと考えられる。検定期初期においては、それ以前に作成された教科書を検定のうへ利用に供することがあったので、検定期中期の教科書であって、また普及舎編の教科書とともにひろく用いられたと思われる『帝国読本』における字体を観察することで、文部省教科書の影響を読み解けるとともに、当時の児童が学んだ変体仮名というものが如何様のものであるのか検討する材料を与えることが期待される。また、変化期であるこの時期の教科書を分析の起点とすることによって、前代および後代の教科書との変化が明瞭にされることが期待された。

ただ、これまで日本語の変体仮名に対応する字体コーパスシステムというものは開発

されていないか、利用しやすいかたちでは存在しないため、システムの開発とコーパスデータの作成を同時に行う必要がある。そこで、システム開発上の問題点を検討するために、まずは基礎データとなる、電子本文の作成および画像の切り出しを行って、どのようにコーパスシステムを作成すべきか知見を積むことに努めた。

②分析の指標としては、字体情報提示の精緻化に取り組み、字体データベースを作成することを試みた。字体の明示方法については、おおまかな慣例というべきものは存在しているものの、研究者間であきらかな合意が存在しているとは言いがたい状況である。たとえば、変体仮名として「可」を字母とする字体には、初画に由来する点を有するものと有しないものが混在していたが、これらを参照する際、1)この相違を捨象して字母のみ示す方法、2)なんらかの手段によって枝番号を示す方法があった。しかしながら、1)については、字体の区別が研究者の恣意に陥る危険性の指摘はあったものの、区別しないことを肯定する経験的根拠はなく、また情報の欠落が発生する問題には無策であった。2)については、字体の区別の恣意性の問題のほかに、枝番号の与え方が恣意に陥って統一されないという問題があった。そこで、それを解決すべく、字体データベースを作成し、統一参照点する方法を考えた。

『和翰名苑』は、江戸中期に編まれた仮名字書である。古筆に取材し、いろは仮名にしたがって仮名字体を類聚したものである。編者藤孔栄の経歴は不明であるが、市井の人物と思われ、取材された古筆も含めて当時の京師の学芸のありさまを思わせる恰好の資料となっている。『和翰名苑』は、仮名字書としても早いものであるが、類書と比較して、字母に訴えない点で一線を画する。類書では、当時の仮名字母研究の隆盛を映して字母と楷書字母との距離によって分類するものがすべてであるが、本書は、岡田「或る江戸期の仮名階層観」に説いたように、平仮名階層とでも名付けるべきものと、草仮名階層とでも名付けるべきものの二階層に字体を分けたうえで、平仮名階層については同字体を集め、草仮名階層については字母が同じ字体を集めるといった構成になっている。

すなわち、『和翰名苑』のこのような構成をデータベース化することによって、ただちに字体データベースとすることができるのである。そこで、本研究では、コーパスなどから参照することを考慮に入れつつデータベースの設計を行うこととした。

4. 研究成果

①については、国立教育政策研究所の江草由佳氏の協力を仰ぎ、3年間の教育課程のうち、2年次にあたる巻までのデータ作成を終

えたところである。今後、字体分析を進め、それを記録・公開するプラットフォームを構築すべく研究を進めたい。

②については、『和翰名苑』平仮名字体データベース』を作成し、安定した番号のもとに検証可能な字体分類を行う基盤の構築を試みた。まだ試用版の段階ではあるが、その詳細は、JADH2016において報告した。また、「近代活字鑄造・販売業者における平仮名字体の用意」においては、データベースの実用を試みた。このなかで、精度に不十分な点がまだまだあることが分ってきたので、今後改善に努めたい。

以上のような試みを通じて、本研究の背景にある問題に対して、解決の糸口を探ることができたものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

岡田一祐「近代活字鑄造・販売業者における平仮名字体の用意」『語文論叢』32、2017。印刷中。査読なし

岡田一祐「或る江戸期の仮名階層観 『和翰名苑』における字体排列」『国語文字史の研究』16、2017。印刷中。査読あり

〔学会発表〕(計 2件)

岡田一祐「『和翰名苑』における平仮名字体認識」日本語学会 2016 年度春季大会、2016年5月15日、学習院大学(東京都豊島区)

岡田一祐「Reorganising a Japanese calligraphy dictionary into a grapheme database and beyond: The case of the *Wakan Meien* grapheme database」JADH2016、2016年9月13日、東京大学(東京都文京区)

〔図書〕(計 1件)

なし

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

・『和翰名苑』仮名字体データベース

<https://kana.aa-ken.jp/wakan/>

・アウトリーチ活動として、『フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」』(於東京外国語大学、2016年11月19日-23日)において、研究代表者岡田が『和翰名苑』平仮名字体データベースと江戸・明治教科書字体コーパスの設計」と題するポスター発表および講演を行った。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 一祐 (OKADA, Kazuhiro)
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化
研究所・特任研究員

研究者番号：80761220

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし